絵画と環境

ー描く環境や作者の心情によって、
使う色や表現方法にはどんな変化が起きるのかー

2024 年　11 月 19 日

３年〇組〇番　〇〇　〇〇
３年〇組〇番　〇〇　〇〇
３年〇組〇番　〇〇　〇〇
３年〇組〇番　〇〇　〇〇

要旨

この探求では「環境や、作者の心情で絵にどんな色や変化が起こるのか」という問いを立て 4 人それぞれアンケートを行った。調査対象は岩倉総合高等学校の三年生で、結果、ゴッホではアンケートからゴッホの作品は悲しそうで、怖さを感じる人が多かった。それはゴッホの生活がうまくいっておらず不安や、周りの人に理解されない孤独感を感じていてその感情が絵画に現れていたのではないかと推測した。精神状態によって絵画表現に影響を及ぼし、本来ない空間を描いたり、物体色ではない色を使用したりする動きが強くなるということが分かった。

ゴーギャンでは画家としての制作を始めた 1875 年から 1903 年までの 27 年の間に何度も作風が唐突に切り替わる時点がある。それらはすべて移住に関係しており、そこに住んでいる人々の考えや心情、その土地自体が持つ雰囲気、自然の鮮やかさなどといった環境に影響を受け、自身の作風を変えて「クロワゾニスム」を取り入れたり、現実のそのままの色彩ではなく、オレンジ色やピンク色といった感じ取った絵画の中の表現としての鮮やかな色彩を用いたりするといった変化が現れていることがわかった。

モネでは同じ場所でも時間帯や天候によって作者の心情に変化が生じ、その心情が色となって表現される。それを見た私たちは作者と同じ心情を受け取るということが言える。このように、描く環境によって心理効果が働き、作者の心情が変化することで使う色の選択が変わることが分かった。

レンブラントでは置かれている状況によって、描かれる表情であったり、顔にかかる影の量が増えたり減ったりと変化しているということが分かった。そして単にそれは明るい、暗いという単純な感情表現だけではなく、生涯をかけて光と闇を見続けたレンブラントの言葉では表せない思想が自画像から滲みあがってくるようだと感じた。

1　問いの背景

私たちは美術を学び、関わる上で絵画の巨匠たちの作品を鑑賞するうちに、特にゴッホの生涯の作品の中で画風が大きく変わる時期があることに気づいた。何か原因となるものがあるのではないかと仮説を立て、インターネットで調べることにした。その結果、ゴッホの生涯について詳しく記述された論文を見つけた。そこでは、

> ゴッホは、33 才になる 1886 年オランダからパリへと向かった。この年の六月には第八回印象派展が開かれ、点描を駆使したスーラのグランド・ジェット島の日曜日は大きな反響を呼んでいた。パリは当時印象派の最盛期であり、当然ゴッホもその影響を受けることとなった。ゴッホの絵はオランダ時代の暗い色調から明るい色調へと大きな変化を示していた。またドガやエミール・ベルナールやゴーギャンらと親睦を深めていた。しかし二年後 1888 年 2 月、ゴッホは明るい光を求めるかのように南フランスのアルルに向かう。実際、ゴッホの作品はアルルの田園風景に代表されるかのように光あふれるものとなった。この地において特筆されるべきことはゴーギャンとの共同生活の顛末であろう。

と述べられていた。この論文から画家が描く環境により絵画の画風が短期間で変化していく中で、使用する色や技法も季節や時間でどう変わっていくのか、どう影響されていくのかに興味がわき様々な画家の作品に着目して調査をした。本稿では、環境や、作者の心情で絵にどんな色や変化が起こるのか。という問いを立て探求していく。

2　調査①

（ア）方法

> 私たちはゴッホ、ゴーギャン、モネ、レンブラントそれぞれの作品について取り上げ、アンケートや美術本を用いながら調査を行った。

（イ）結果

〈ゴッホ〉

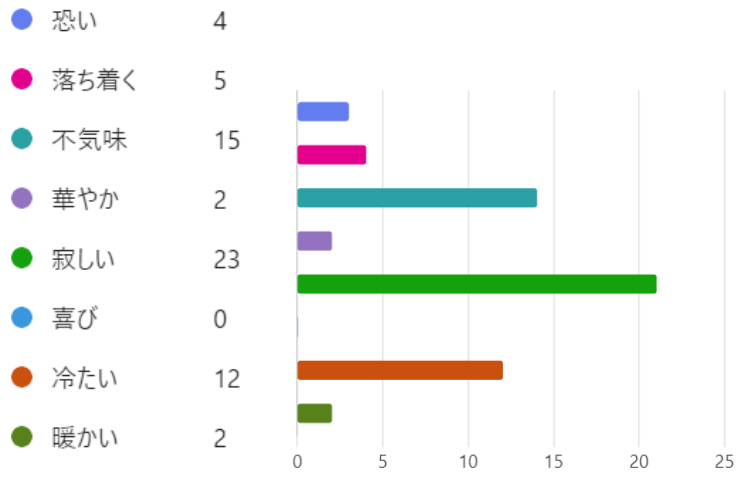
ゴッホは 1853 年 3 月 30 日 – 1890 年 7 月 29 日まで生き、37 歳と短い生涯の中に約 2000 点もの作品を残した。私はその中でも変化がわかりやすい自画像に着目し、二つの自画像を比べ変化を調べることにした。

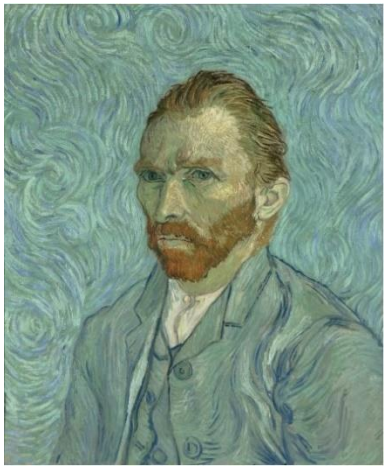
(1) の自画像はゴッホがフランス，パリに住んでいた時に描いた作品、(2) の自画像はゴッホが精神病院に入ったときに描いたとされている作品だ。

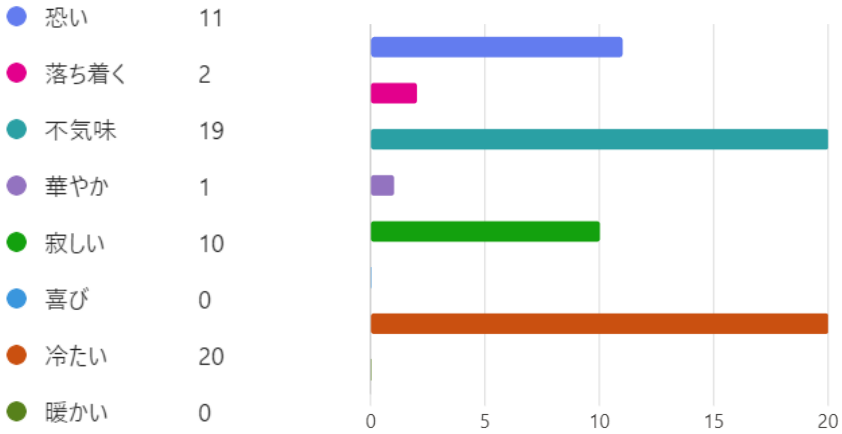
まずこの二つの作品に対してそれぞれ印象を受けるか調査するため岩倉総合高校の生徒（３２名）にアンケートをした。アンケート内容は二作品の印象に近いものを恐い、落ち着く、不気味、華やか、寂しい、喜び、暖かい、冷たい、の中から選択するというものだ。(複数回答可)

アンケートの結果、(1) は「不気味」「寂しい」「冷たい」とマイナスに感じた人が多かった。(2) は「恐い」「不気味」「冷たい」を選んだ人が多く、(２)でもマイナスに感じた人が多かった。

（１）







（２）

この二つの自画像ともマイナスに感じた人が多い、という結果になった。

グラフをよく見てみると（１）では寂しいと感じた人が２３人と多く、次に不気味と感じた人が１５人という結果になった。（２）では冷たいと感じた人が２０人で、不気味と感じた人が１９人だった。

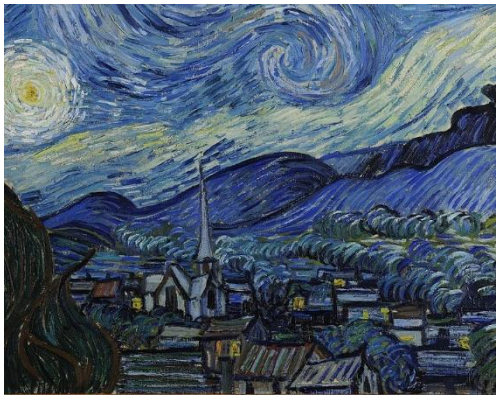
ゴッホは当時金銭面では弟のテオに面倒を見てもらい生活していて、作品も売れず画家人生はうまくいっていなかった。その悩みが自画像の表情や、自信のなさが現れているため観る人にもその感情が伝わっているのではないかと考えた。

二つの絵の変化については、パリで書いた（１）の絵はゴッホの画風が安定していて背景はクリーム色の色面で塗られていて、使用されている色も過度な改変は行われていない。

（２）の絵では全体的に青緑の色を使われていて、背景は渦巻模様が描かれている。（１）と比べると表現が空想的であるといえる。

私はゴッホは精神状態が悪化すると表現が空想的になり、渦巻き模様といった空想の表現を多用するのではないかと考えた。

そこからほかの作品を調べてみると有名な星月夜も同じ精神病院の窓から描かれていることが分かった。



アンケートからゴッホの作品は悲しそうで、怖さを感じる人が多いがそれはゴッホの生活がうまくいっておらず不安や、周りの人に理解されない孤独感を感じていてその感情が絵画に現れていたのではないかと推測し、精神状態によって絵画表現に影響を及ぼし、実際にゴッホ自身に幻覚が見えていたのか、空想で描いたのかは分からないが、本来ない空間を描いたり、物体色ではない色を使用したりする動きが強くなるということが分かった。

〈ゴーギャン〉

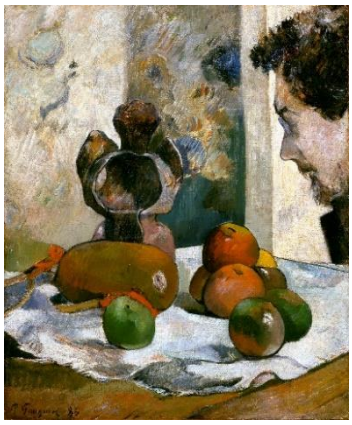
ゴーギャンは、1848 年にパリで生まれた画家である。私はこの画家の作品が生涯のうちに大きく変化していることに気が付いた。調べてみると移住を繰り返しており、作風の大きな変化は移住先が変わるごとに起きていることがわかった。そこで、私は移住先の変化といった周囲の環境によって作品にどのような変化が現れるのかを調べるためにこの画家の生涯を辿ることにした。

ゴーギャンは 25 歳頃から故郷であるパリで絵を描き始め、印象派の画家たちと多く交流していた。その時期に描いていた作品は、「ヴィロレイの森」下のように印象派の特徴である “屋外の風景や光の移ろいを曖昧な境界と黒色を使わない柔らかな色彩で描いた”ものだった。ゴーギャンの初期の作品は見たものの色彩を大きく変えることはなく、そのままの形を描写したものが多い。

「ヴィロレイの森」1876 年

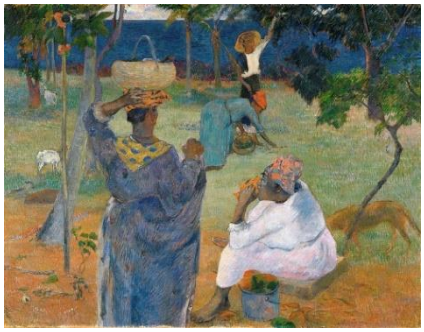
1886 年、パリから、ブルターニュ地方のポン・タヴァンへ移り、画家たちのコミュニティで暮らし始めた。そこでゴーギャンはエミール・ベルナールという画家と出会い、「草地のブルターニュの女た

ち」という作品を受け取った。その作品は現実にない色を取り入れており、対象物の質感や立体感を排除し、太い輪郭で囲んだ平坦な色面で描く「クロワゾニスム」という技法を用いて描かれていた。日本の浮世絵の影響を受けて生まれた技法とも言われており、ポン・タヴァンの画家たちもこれを多用していた。ゴーギャンはこのような画家たちとポン・タヴァンという環境、日本の浮世絵のブームなどによって、自身の作品も影響を受け「ラヴァルの横顔のある静物」下のような“対象物の輪郭線を強調し、平面的な色彩によって構成”された作品を制作するようになった。ここで初期の作品から大きく画風が変わったことがわかる。単純な絵画技術の上達というだけではなく、環境による影響が現れている。



「ラヴァルの横顔のある静物」1886 年

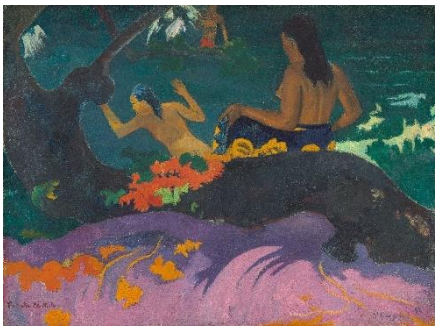
その後ゴーギャンはパナマを訪れ、カリブ海に浮かぶ西インド諸島マルティニークのサン・ピエールという村に滞在した。原住民の小屋に住んで人間観察を楽しみ、インド系移民の人々や戸外の情景を描いた作品を 12 点前後制作した。この内の作品「果物狩り、またはマンゴーの中で」下のように、ゴーギャンの初期の作品の印象派のような画風とポン・タヴァンで身に着けたクロワゾニスムを取り入れた画風を組み合わせたような作品となっている。加えて、インド系移民の明るさやエスニックな雰囲気が色彩に表れているように感じる。現地の明るく民族的な環境の影響を受けた形で画風が変化したことがわかる。



「果物狩り、またはマンゴーの中で」1887 年

1891 年、ゴーギャンはヨーロッパ文明と人工的・しきたり的なものから離れるために、フランス領タヒチへ旅行し、その土地の文化と風景に深く魅了された。その地で制作した作品は、「ファタタ・テ・

ミティ（海辺で)」下を見てもわかるように、これまでの作品と比べてもより鮮やかな配色によって構成されており、印象派特有の筆跡が完全に排除され、色面で描かれたものとなっている。これはゴーギャンがタヒチ島の異国情緒に敏感に反応し影響を受けたことによる。そうして原始的で神秘的な要素を取り入れた作品は、西洋美術における伝統的な表現とは一線を画し、後の芸術家にあらたな視点を与えた。



「ファタタ・テ・ミティ（海辺で)」 1892〜1892 年

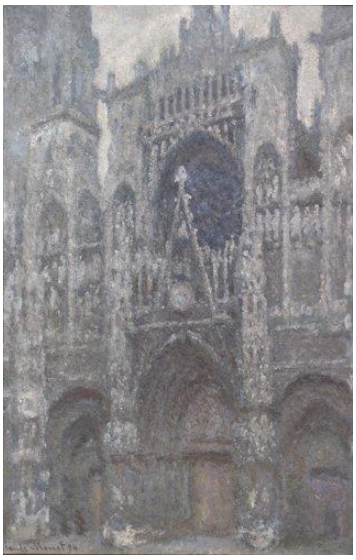
これらの作品を見てわかるように、ゴーギャンには画家としての制作を始めた 1875 年から 1903 年までの 27 年の間に何度も作風が唐突に切り替わる時点がある。それらはすべて移住に関係しており、そこに住んでいる人々の考えや心情、その土地自体が持つ雰囲気、自然の鮮やかさなどといった環境に影響を受け、自身の作風を変えて「クロワゾニスム」を取り入れたり、現実のそのままの色彩ではなく、オレンジ色やピンク色といった感じ取った絵画の中の表現としての鮮やかな色彩を用いたりするといった変化が現れていることがわかった。

＜モネ＞

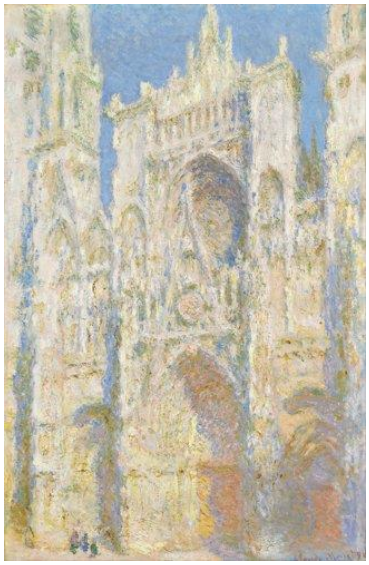
同じく印象派であるモネは「ルーアン大聖堂」という作品で、色についての問いを明らかにしていた。これらの作品は同じ場所だが異なる時間帯や天候に描かれたものである。その中で二枚の作品を取り上げ、比べた。一枚目の作品(1)は曇りでおそらく午後に描かれたもの、二枚目の作品(2)は晴れでおそらく午前に描かれたものである。

「ルーアン大聖堂」

色には心理効果というものがあり、例えば暖色系で明度が高いと希望や活発といったイメージが浮かび上がる。反対に寒色系で明度が低いと孤独や不安といったイメージが浮かび上がる。この心理効果は作者に大きく影響するのではないかと考えた。そこで「ルーアン大聖堂」の二作品について、心理効果による作者の心情と色の変化の関係を調査するために、岩倉総合高校３年生を対象にアンケートを行った。アンケート内容は二作品の印象に近いものを恐い、落ち着く、不気味、華やか、寂しい、喜び、暖かい、冷たい、の中から選択するというものだ。

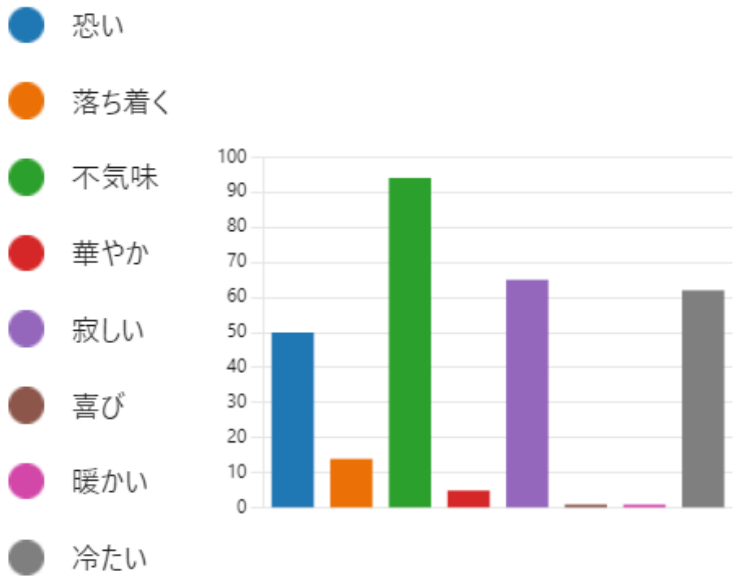


(1)

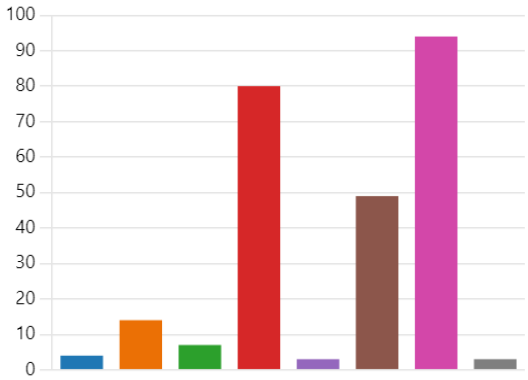


(2)

アンケートを行った結果、一枚目の作品(1)では不気味、寂しいという印象を選択した人が多く、二枚目の作品(2)では暖かい、華やかという印象を選択した人が多かった。



(1)



(2)

したがって、曇りの場合、作者は冷たくかたいイメージを浮かべる傾向にあるため、黒や灰色などの暗く重い色を使う。一方で晴れの場合、作者は暖かく柔らかいイメージを浮かべる傾向にあるため、水色や黄色などの明るく軽い色を使うことが分かった。

つまり、同じ場所でも時間帯や天候によって作者の心情に変化が生じ、その心情が色となって表現される。それを見た私たちは作者と同じ心情を受け取るということが言える。このように、描く環境によって心理効果が働き、作者の心情が変化することで使う色の選択が変わることが分かった。

＜レンブラント＞

１６０６年にオランダに誕生したレンブラントは「光の魔術師」といわれるほど光を巧みに使い、物語性を感じられる絵を描いたことで有名であり、また、生涯に多くの自画像を描いたことでも有名である。そこでレンブラントの自画像に焦点を当てレンブラントの人生と光と影の変化、関わりについて考えた。

調べていくとレンブラントが初期の時、２２歳に描いた自画像（1）とそこから少し時が経った３４歳に描いた自画像（2）にある変化が起きたことに気が付いた。それは顔にかかっている影の量だ。二つとも左から光が当たり、顔の右側が影になっているということは変わっていない。しかし顔を覆い隠す影の量に注目してみると初期の若い頃に描かれた自画像は顔の半分以上が影になっていることがわかる。レンブラントが２０代であったときに描かれたほかの自画像を見てみてもそれ以降の自画像と比べると顔にかかる影の量が多いように感じた。これは若い頃のレンブラントがまだ画家としての「自信」というものがなかったからなのではないかと考えた。そう考えると（２）の３０代に描かれた自画像は影の量が少なくなっているのはレンブラントがこのころ画家として順調な時期であったことが関係していると考え、顔を覆い隠すように自画像を描いていた２０代のころとは異なり、画家としての「自信」が表れているように思えた。

(1)

(2)

そして老年期の自画像（３）を見てみるとこれまでの自画像と比べ一段と険しい表情をしていることがわかる。レンブラントが画家として順調であった「夜警」を描いた年（１６４２年）に妻のサスキアを亡くしてしまい、そこから経済的にも苦しい状況になるなど、不幸が続いた壮年期に描かれた自画像からはそんなレンブラントの苦悩を感じることができる。影の量も画家として順調だったころの自画像と比べると少し多くなったように感じた。

このような自画像の変化からレンブラントの置かれている状況によって、描かれる表情であったり、顔にかかる影の量が増えたり減ったりと変化しているということが分かった。そして単にそれ

は明るい、暗いという単純な感情表現だけではなく、生涯をかけて光と闇を見続けたレンブラントの言葉では表せない思想が自画像から滲みあがってくるようだと感じた。

（３）

（ウ）考察

これらの４人の画家の調査結果から、実際に画家は作品制作時の心情や環境に大きく影響を受けており、短期間で、色彩や光、筆の扱い方といった表現の仕方において変化が現れていることがわかった。中でも色彩における変化が現れたという調査結果が多いことに気が付いた。また、その色彩の変化は、状況によって違いがあるように感じた。

３　調査②

（ア）方法

調査①の考察から色の変化には法則性があるのではないかと考えた。例えば、ゴッホは精神状態が悪いと青色などを多用しており、ゴーギャン、モネは環境による感情の高まりによってピンク色や黄色といった色を使用していた。そこで、色彩は作者の心情との結びつきによって変化が起こると考え、色の印象についてインターネットで調査を行い、使う色の変化についてより詳しく探求することにした。

（イ）結果

色彩の変化についての研究を見つけた。色には感情的影響、生理的影響、文化的影響がある。また感情的な影響では色は感情と深く関わりを持っており、人は色の明暗によって寂しい、楽しいといった感情

に大きな影響を与えている。生理的な影響では神経に影響を与える。明るい赤は交感神経系に刺激を与えるので血圧をあげるともいわれており、逆に青や緑はリラックスさせる心理変化があることが分かった。赤みのある明度、彩度が高い色は興奮色とされ心拍数を上げる効果、青みのある明度、彩度が低い色は鎮静色とされ落ち着く効果がある。

（ウ）考察

このことから生理的な影響により画家本人の制作環境が明るい昼の場合興奮状態になり使用される色も明度、彩度が明るく、赤やオレンジなどといった暖色が使用される。暗い夜の場合は脳が鎮静状態になり明度、彩度の低い青や緑を多く使用するのではないかと考えた。

また、ゴッホは感情的な影響により色彩が変化しているのではないかと考えた。ゴッホの作品には青色がよく使われている。青色には悲しみといったネガティブな感情を表すとされており、当時のゴッホの心の中の悩みが色として現れているのではないかと考えた。

4　結論

この探求では、調査①で４人の画家について調べそれぞれの変化について考察した。４人の結果から色の明度、彩度が作者の感情や心理に関わりがあるのではないかと考えた。そこで調査②では参考文献をもとに感情的要因、生理的要因、文化的要因があることがわかり、そこから絵画には感情的要因では作者の当時取り巻く環境や心理状態によって使われる色の明度、彩度が変わり、明るいとポジティブな感情、暗いとネガティブな感情を表した。また生理的要因では、制作環境が昼といった明るい場所だと脳が興奮状態になり、使われる色も明度、彩度が明るい色になる。一方夜といった暗い場所だと脳が鎮静状態になり、使われる色も明度、彩度が暗い色になるのではないかと考えた。

このことから、作者の心理や感情により明度、彩度の明暗がかわり、使われる色もポジティブな気持ちだと明度の高い色、ネガティブな気持ちだと明度の低い色というように心情が作品に大きな影響を与えることが分かった。

今回の探求では環境によって使う色や表現方法にはどのような変化が起こるのかという漠然とした問いだったため４人の画家について調べたときに様々な結論が出てしまった。

5　感想

今回の探究活動を経て私たちは多くのことを学んだ。例えばどの画家にも共通している“環境”と“心情”は密接に関わり、作品制作にとって大きく左右するものである。そして制作に直接関わっていない我々、

鑑賞者にも大きく影響することが分かった。今回の実験や考察を通して絵画の奥深さを知り、作品の背景を考える面白さを改めて感じた。私たちはそれぞれ４人の画家について調べたため、結論をまとめるのに時間を要したが、様々な観点から追及したことで新しい発見や、絵画についての視野を広げることが出来た。

参考文献

This is media (2022)「ゴーギャンとは？ポスト印象派を牽引した画家の生涯と代表作品を分かりやすく解説 」＜thisismedia (thisisgallery.com)＞

伝つくラボ研究員(2018)「色で感情が動く！？色が持つ心理効果と活用方法」＜https://kimoto-sbd.co.jp/tsutatsukulab/2018/01/21771/＞

幸福　輝 (2011)「もっと知りたいレンブラント　生涯と作品」株式会社東京美術